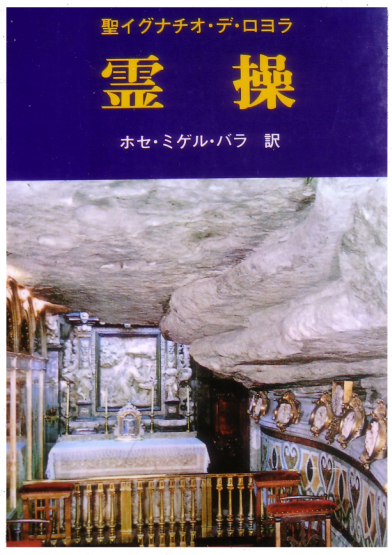
イグナチオの「霊操」
～サビエル展を開催して⑤～

出世欲に燃えていたサビエルを神の道を歩む者に変えさせたイグナチオ・ロヨラ。サビエルの回心（心を神に向ける）はロヨラが記した「霊操」によるものであることは間違いない。

サビエルが十五歳年上のロヨラと出会ったのは留学先のパリの大学の寮。同室になったロヨラはこの時、すでに自身の霊魂の動きを観察し、自分への神の望みを見極める経験をしていた。それを黙想のためにまとめた手引書が「霊操」である。

霊操とは、神との出会いのために祈りを通じて、世の中のいろいろな欲望への執着から離れる魂を準備・整えることと言える。サビエルも三十日間の霊操を体験して回心し、キリストのために生涯をささげる誓願を立て、ロヨラと一緒にカトリック修道会「イエズス会」を創立した。

現在も世界中に二万人を超えるイエズス会員がいるが、彼らは全員「霊操」を体験している。



「霊操」＝表紙はロヨラが霊操を体験したスペインのマンレサの洞窟（今は聖堂になっている）

アルペ総長の胸像を囲む　バラ神父（中央）指導の黙想会参加者

霊操のための黙想は必ずしも三十日とは限らない。イエズス会員は年に一度は黙想するが、時間が取れない場合、三泊四日とか八泊九日のコースもある。会員以外も同様で、私も昨年は三泊四日、今年は八泊九日の霊操のための黙想を広島市安佐南区にあるイエズス会の「長束黙想の家」で体験した。

この黙想の家の入り口にはアルペ神父の胸像がある。彼は戦前、山口教会主任神父、一九四二年（S17）からは広島長束修練院（現・黙想の家）で修練長。広島に原爆が投下された際は、医学専攻の経験を生かし、修練院で被爆者の治療に当たったことでも有名で、その後、日本管区長、イエズス会総長を務めた神父である。

私の黙想の指導神父は霊操の日本語訳者のホセ・バラ神父（現下松教会主任神父）。今年は全国から九人のシスターが参加し、男性は私一人だった。

黙想の一部を紹介すると、八日間、食事中も沈黙（と言っても私は妻の個室を訪ねて時々、話をしたが…）。指導司祭の講話（約四十分）を聞き、個室内や敷地内で黙想する。私は早朝ミサの前、黙想の家の裏山にある墓地を訪れた。いやが上でも「生と死」について考えさせられる。

キリスト教に限らず宗教に「祈り」は欠かせない。しかし簡単に祈りと口にするが、生活の中で集中して祈るということは難しい。大相撲の日馬富士が好きだが、彼が口にする「全身全霊を込める」ことは祈りでも大切なことだ。

口先だけの食前の祈りだけでなく、全身全霊を込めて祈る時、ロヨラやサビエルのように少しは回心できるのかもしれない。口先だけの祈りでは何回、黙想会に参加しても、その時は「よし!!」と思うが、時間とともにいつもの生活に返ってしまう。

最後にロヨラの祈りを紹介するが、こんな祈りを全身全霊を込めて祈る時、人は回心するのだろう。

―自分をささげる祈り―

「主よ、私の自由をささげます。

私の記憶、知恵、意志を皆受け入れてください。私のものはすべて、あなたからのものです。

今、すべてをあなたにささげ、み旨にゆだねます。私に、あなたの愛と恵みを与えてください。

私はそれだけで満たされます。それ以上何も望みません」